

高い効果 チーム一丸で

回復期リハビリ

森之宮病院

宮井一郎

院長代理



今取り上げる「回復期リハビリ」は、脳卒中や骨折

の治療後の患者が自宅など住み慣れた場所に戻り、自立した生活を維持するために不可欠な医療だ。現状などについて森之宮病院(大阪府城東区)の宮井一郎・

病院の実力

*大阪編161

院長代理「写真」に開いた。——回復期リハビリの位置づけは、65歳以上の人口が約3割を占める超高齢社会を介護保険制度とともに支えてい

るのが回復期リハビリです。国民皆保険の下、病気や老化で低下した身体機能の回復を促すリハビリを病棟で一定期間、誰もが等しく受けられる制度は世界的にも珍しく、恵まれていきます。——国の基準を満たした専門病棟「回復期リハビリテーション病棟」で行うリハビリとは、理学療法士は運動機能の改善を図り、作業療法士は食事や着替えなど生活動作の練習の機会を提供します。これらは、患者の体が運動を学習するための「授業」に相当します。看護・

病院の実力「回復期リハビリ」

医療機関別実績(2021年6月現在)
(読売新聞調べ)

医療機関名	回復期リハ病床数	1単位は20分		リハ科専門医(人)	認定臨床医(人)
		脳卒中などの1人1日あたりの単位数	骨折などの1人1日あたりの単位数		
大阪府					
森之宮	168	7.1	6.4	2	0
	151	8.2	5.9	8	8
	100	8	6.6	2	1
	96	8	6.2	0	0
	94	5.7	5.1	1	2
	90	8.5	4.9	1	1
	86	7.5	6.4	0	0
	56	5.8	5	4	4
	52	7	6	1	1
	52	6	4.8	1	0
	50	8.4	4.3	0	0
	50	7.8	6.4	2	2
	45	6.8	3.9	2	0
	44	7.5	5.6	2	0
	42	9	8.1	0	1
	42	7.5	6.8	1	1
	40	8.1	5	0	1
	40	7.3	7.1	0	0
	38	7	5.1	0	0
	32	6.2	—	0	1
	28	5	3.9	0	1
	26	5	2.8	1	0

「リハ」はリハビリテーション、「JCHO」は地域医療機能推進機構、「セ」はセンター、「—」は無回答または不明。単位数は小数点第2位以下を四捨五入。

全国の調査結果は20日の「安心の設計面」に掲載しました。

介護職のサポートを受け、歯磨きをしたりトイレに行ったりする動作は「復習」、見舞いに来た家族と一緒に歩くなどの自発的な行動は「自習」にあたり、病棟生活での全ての活動がリハビリになります。——リハビリの効果を高めるには、患者や家族と関わる医師、看護・介護職、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士らがチームとして共通の認識と目標を持つことが大切です。リハビリの進み具合や合併症に合わせてリハビリの実施計画書を定期的に見

直しながら、計画、実行、評価、改善(PDCAサイクル)を繰り返して、質の高いリハビリを集中的に行います。——家族の役割は、患者が自宅で安全に暮らすには、家族の協力が欠かせません。急性期病院から転院する前に、候補のリハビリ病院を家族が見学するケースも増えています。また、自宅で患者を受け入れるのに不安があるときは、家族がリハビリの現場に向いて患者本人の自立度や必要な支援を確認し、介助の練習をすると、自宅での

生活をイメージしやすくなるでしょう。——森之宮病院の特色は、脳卒中に対するリハビリの効果に早くから注目してきました。全担当医がリハビリテーション科専門医か神経内科専門医の資格を持ち、脳卒中リハビリの認定看護師が3人います。退院を支援する社会福祉士16人を含めて専門性の高いスタッフをそろっており、約160人いる療法士の教育体制も充実しています。